

Title	サブカルチャーの存在とナショナル・アイデンティティの形成： イスラエルの事例研究
Sub Title	Subcultural differences and formation of National identity : a case study of Israeli society
Author	鶴木, 眞(Tsuruki, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.12 (1977. 12) ,p.303- 338
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	五十巻記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19771215-0303">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19771215-0303</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# サブカルチャーズの存在と

# ナショナル・アイデンティティの形成

——イスラエルの事例研究——

鶴 木 眞

## 序

### 目 次

- 一 イスラエル社会の構造的特質
- 二 イスラエル国家の潜在的政治脆弱性
- 三 異なる下位文化の存在と国家レベルにおけるアイデンティティの形成について

## 序

一九五八年十一月、当時のイスラエル国連大使アバ・エバンは、中東における難民問題にたいするイスラエルの立場を次のように述べている。

「中東の難民には二つの種類がある。しかしこのうちの一つは常に無視されてきた。それはイラクやイエーメンや北アフ

サブカルチャーズの存在とナショナル・アイデンティティの形成

リカに住んでいた四十万人以上のユダヤ人が、強制的にそれらの国々から出国させられた事実である。彼らが今まで、アラブ難民と異つて難民としてあつかわれてこなかつたのは、イスラエルによつて直ちに新しい移民として受け入れられたからである。彼らは自分たちの意志に反して長く住んでいた土地を追われ、財産を放棄させられたのであつた。ごく最近の事例では、エジプトから二人のユダヤ人が出国させられており、そのうち一万五千人がイスラエルに移り、残りはヨーロッパへむかつたのである<sup>(1)</sup>。

イスラエル政府は、パレスチナ難民への救済処置や補償が論じられるたびごとに、対抗的にアラブ諸国からのユダヤ難民の存在と、彼らへの補償を要求する姿勢をとりつづけてきた。これには二つの理由があると思われる。第一に、イスラエル政府は一定の期間内に名のり出ない持主不明の不動産などを国有化した<sup>(2)</sup>が、そのほとんどはパレスチナ難民がイスラエル国内に残していた財産であつた。イスラエル政府はこの行為を、ユダヤ難民がアラブ諸国に残してきた財産と相殺するといふ形で正当化しようとする国際的理由である。第二は、イスラエルに持ち込めた財産がきわめて限られていたためにアラブ諸国で生活していた時と比較して著しく生活程度を下げなければならなかつた多くのユダヤ難民の持つ「社会的不満」に、イスラエル政府は常に配慮しているという国内的理由である。イスラエルの国会議長と副議長はともにアジア・アフリカ系のユダヤ人であるが、彼らの一九七五年六月の演説は、イスラエル政府の姿勢が持つこの二つの理由を明瞭に示している。副議長ベン・ロポラトは、パレスチナ難民とユダヤ難民とを一九四七年ないし四八年の時点で比較すると、数の上では前者が五九万人程度と推定されるのに対し、後者は六五万人を上廻つていると推定され、また放棄した財産の相互比較についてもはるかにユダヤ難民の損失の方が大きいと主張している。さらに彼は、議長のイェンチャフと共に次のように主張している。すなわち国連およびその他の国際機関は、幾年にもわたつてパレスチナ難民に与えてきたのと同額の補償や援助をユダヤ難民にたいしても支払うべきである。

イスラエル政府の姿勢の國際的理由、つまり國際政治のダイナミクスの中でユダヤ難民をパレスチナ難民への相殺力をもつたカードとして用いようとすることは——その賛否は問わないとして——われわれにとつて政治宣伝という意味で理解できる。しかしながら、もう一つの國內的理由、つまりイスラエル政府が常にユダヤ難民の持つ社会的不満へ配慮していることを示す必要は何故なのかは、イスラエルの社会構造の分析をまつてはじめて理解しうる問題であらう。

そこで拙稿では、まずイスラエル社会の構造的特質をユダヤ人口の集團的特質から分析し、次にそのような特質が國家レベルでの政治的統合を脆弱化するものであることを論じ、最後にイスラエルの事例から異なる政治的低位文化 (Political Sub-culture) 間の統合について、國家レベルでのアイデンティティ<sup>(2)</sup>の形成という視点から一つの結論を導き出したいと考える。

## 一 イスラエル社会の構造的特質

イスラエル社会の構造的特質を、ユダヤ人口の民族的特質から考える場合、イスラエル社会は大きく二つの集團に區別することができる。その一つはヨーロッパ系ユダヤ人集團であり、他の一つはアジア・アフリカ系ユダヤ人集團である。前者は一般にはアシケネナージムとよばれ、後者はセファルディムとよばれている。この二つのユダヤ人集團の區別は、ユダヤ人のディアスポラの歴史と深い関係がある。紀元一三五年、ローマ帝國への反抗が失敗しユダヤ人がパレスチナから追放された後、主としてドイツ・ポーランド・ロシアに定着した集團と、イベリア半島に定着した集團が、それぞれ独自のユダヤ文化を發展させた。アシケネナージムとはヘブライ語でドイツ人を意味し、彼らはヘブライ語とドイツ語を基にしたイーディッシュ語をつくりあげた。他方、セファルディムとはヘブライ語でスペイン人を意味し、彼らはヘブライ語とスペイン語を基にしたラディノ語をつくりあげた。<sup>(1)</sup>しかし、イベリア半島がキリスト教勢力に征服されると、カトリックの異端審問によつて強制改宗に應じないユダヤ人は、一四九二年この半島から追放され再度流浪の民となり、モロッコを中心とした北アフリカの地

中海沿岸地方や、南フランス、イタリア、バルカン半島などにちらばつていつた。また彼らがイベリア半島で作りあげた高度なユダヤ宗教文化も、広くアジア・アフリカの既存のユダヤ人社会に大きな影響を与えたのである。<sup>(2)</sup>しかし、厳密に言うならばアジア・アフリカ系ユダヤ人を一括してセファルディム(セファルディの複数)と呼ぶのは正しくない。何故なら、ユダヤ人がパレスチナを離れた歴史的契機は一度だけでなく、大きなものを拾つても、紀元前七世紀のアッシリアによるイスラエル王国の滅亡、紀元前六世紀の新バビロニアによるユダ王国の滅亡(バビロン捕囚)などにより、ローマ帝国によるユダヤ人追放以前にすでにインドをふくめた中央アジア、中東、北アフリカ、イエーメン地域には、ディアスポラのユダヤ人社会が存在していたと考えられる。したがつて、アジア・アフリカ系ユダヤ人のすべてがイベリア半島系のユダヤ人であるとは言えない。しかし、今日一般にはセファルディムとアジア・アフリカ系ユダヤ人とが、同義語として使われる理由は、アジア・アフリカ系ユダヤ人の祈祷形態が厳密な意味でのセファルディムから強い影響をうけていることと、アシケナージム以外の者を一括して呼称する際の名称がイスラエル社会で必要なためである。<sup>(3)</sup>従つて、イスラエル社会は言葉の厳格な定義に従わず、一般に用いられている仕方によれば、民族的相違の境界と宗教的相違の境界とが、ほぼ重なりあつた二つのユダヤ人集団から形成されているといえよう。<sup>(4)</sup>

これらの二つのユダヤ人集団の相違が、今日のイスラエル社会の特質を形成している理由は三つある。

第一に、移民を主体に構築されたイスラエル社会が、建設後きわめて日が浅いため二つのユダヤ人集団間の社会的、文化的統合がまだ十分になされていなければならないためである。たしかにイスラエル社会は、国家成立以前あるいはその直後にみられたような政治的制度の多元性<sup>(5)</sup>を克服し、その面では既に統合度の高い国家であるといえよう。しかし、文化的、社会的にはいまだに多元の様相を強く残している。イスラエル社会には、拙稿でとりあげている二つの民族的集団間の文化的、社会的相違ばかりでなく、宗教的な人々と世俗的な人々<sup>(6)</sup>、都市の人々と農村の人々、移民の第一世代と第二世代などの間に大きな相違

がある。このような諸集団間の相違にもかかわらず、アシケナージム集団とセファルディム集団という二つの民族的に異なる集団間の相違が、イスラエル社会にとつて憂慮すべきであるのは、その相違が教育程度および収入の相違と高い相関関係をもつて重なりあつてゐるからである。

イスラエルは国家建設の過程で、新しい移民の吸収と産業化の達成という二つの目標を同時に追求しなければならなかつた。そのため住宅、教育、医療などへの公共投資をまず行い、その産出 (output) として若い労働力の育成と確保につとめたのであつた。マトラスによれば、このためにイスラエル社会は他の新興国と著しく異つて、近代的産業構造を支える労働力の存在を前提として産業化をすすめることができたとしてゐる。<sup>(7)</sup>ところがこの産業化過程での職業間移動には、二つのユダヤ人集団で明らかな違いがあつた。それは、アシケナージムの方がセファルディムよりもはるかに迅速であつた。その上、セファルディムの社会階層を上昇するような職業間移動には明確な限界があつた。<sup>(8)</sup>その原因を、セファルディムの教育程度の相対的低さにもとめる事が一般的である。なぜなら、多くのアシケナージムはイスラエルを公正な競争原理にもとづく近代的社会であり、セファルディムの階層上昇が限定されている理由は、彼らがセファルディムであるためでなく教育程度が低いためであるとしてゐるのである。

イスラエル社会が、完全にセファルディムをふくめた公正競争原理にもとづく社会であるか否かは別として、たしかに一九四〇年代から五〇年代にアジア・アフリカの主としてイスラム地帯から移住した彼らは、アシケナージムに比して教育程度<sup>(9)</sup>が低く、近代的な職業訓練にかけており資産に乏しくかつ大家族であつた。<sup>(10)</sup>このため、既に述べたようにイスラエル政府はこれらの移民を産業化の過程に吸収するため公共投資の一つとして教育を重視した<sup>(11)</sup>にもかかわらず、アシケナージムに比してセファルディムの上級学校への進学率はきわめて悪いのである。<sup>(12)</sup>中等教育のレベルへの進学率は高まつたが、<sup>(13)</sup>中途退学者の率も多いことも事実である。<sup>(14)</sup>さらに、公正競争の原理に立つた社会にもかかわらず、セファルディムがイスラエル

表 1

Average gross annual money income per urban employee's household, by continent of birth and period of immigration of household head and size of

household

サブカルチャーの存在とナショナル・アイデンティティの形成

	1975			1975	1974	1973	1972	1970	1969	1965	
	Average number of earners	Average size of household	household (percentages)								
	IL.										
All Households	1.5	3.9	100.0	31,400	24,500	17,500	15,400	11,800	10,400	7,800	
continent of birth and period of immigration											
jewish families	1.5	3.8	97.2	31,500	24,600	17,600	15,500	11,900	10,500	7,800	
Asia-Africa	1.5	4.8	35.1	27,500	20,600	14,300	12,800	9,700	8,300	6,200	
Immigrated:											
up to 1947	1.6	4.5	2.5	31,000	20,700	16,400	16,000	11,000	9,100	7,800	
1948-1954	1.6	4.7	19.3	28,400	21,400	15,100	13,300	10,000	8,700	6,200	
1955-1960	1.5	4.9	5.7	27,300	20,700	13,900	12,300	9,500	7,900	5,500 { 1955-1960 1961+	
1961+	1.5	4.9	7.6	24,200	18,300	12,400	10,500	8,300	6,900		
Europe-America Immigrated:	1.5	3.1	40.7	33,400	26,600	19,300	17,200	13,200	12,000	8,600	
up to 1947	1.5	3.0	11.0	39,000	30,600	21,700	19,600	14,700	13,100	10,400	
1948-1954	1.5	3.3	13.0	34,000	24,500	19,400	16,800	13,000	11,100	7,900	1948-1954
1955-1960	1.5	3.0	4.0	31,500	25,600	19,600	15,300	12,200	12,200	6,900	1955-1960 1961+
1961+	1.5	3.1	12.1	28,400	23,000	15,600	15,200	10,200	9,500		
Israel born	1.5	3.6	21.4	33,400	27,800	21,700	17,400	13,600	11,900	9,400	
Non-jews	1.6	6.3	2.8	29.3	23,200	14,900	11,200	8,100	8,400	-	

表 2

—Average gross annual money income per urban employee's household, by age and years of schooling of household head  
1975

Age of household head	Years of schooling of household head					Income total	Average number of earners	Average size of household	households (percentages)
	13+	9-12	5-8	1-4	0				
	IL.								
TOTAL	39,500	31,800	26,500	25,900	21,700	31,400	1.5	3.9	100.0
14-24	18,400	24,300	21,500	..	..	22,600	1.5	3.5	6.7
25-34	36,200	29,300	22,300	18,800	..	29,800	1.4	3.6	28.4
35-44	44,600	34,900	26,600	24,700	23,500	33,500	1.5	5.0	22.1
45-54	47,400	36,700	31,100	30,600	24,000	35,400	1.7	4.3	22.5
55-64	41,300	33,200	27,800	23,500	18,300	31,100	1.5	3.0	15.9
65+	32,900	26,700	20,500	23,100	..	25,900	1.3	2.3	4.4

に移住した時、彼らは社会的にも地理的にも末梢などにおかれることがほとんどであった。このため彼らの、ヨーロッパから来た移民に比して後進地域からきたという、すでに持っていた格差は一層拡大されていったのである。かくて、セファルディムはごく一部の例外をのぞいて、階層を上昇する職業間移動が困難であった。この事實は、都市居住者の平均年収と出身国との関係(表1)、および平均年収と教育水準との関係(表2)によつても証明される。明らかにイスラエルでは、先に述べたようなアシケナージムとセファルディムという相違に、社会的、文化的相違を形成する主要な要因と考えられる教育程度と年収の相違が高い相関をもつて重なりあつていることを確認することができる。イスラエル文部省の主任研究員であるシルド博士は「たとえ教育程度が同等だとしても、セファルディムの収入はアシケナージムに比して格差がある。私のみる限り、将来、教育格差の方がはやく解消するように思われる」と述べている<sup>(16)</sup>。しかし、その教育格差の是正について、独立後二八年のイスラエルは未だ試行錯誤をくりかえしている状態にあり、イスラエルで生まれあ



るいは育つたセファルディムの第二世代がおかれている貧困、挫折、逸脱というような社会的に排除された度合は、彼らの両親たちと比べて改善されたという証拠にむしろ乏しいのである。<sup>(16)</sup>

二つのユダヤ人集団の相違がイスラエル社会で顕著である第二の理由は、イスラエル社会への移民の動機の相違にある。ヘブライ語で移民を意味する言葉は、「オリム」と「メハグリム」の二つがある。オリムとは、ユダヤ人のディアスポラにおける生活様式のいくつかの面を意識的に否定し、イスラエルにおいて新しいユダヤ人の生活様式を築きあげようとするパイオニア的試みとむすびついているのである。ところが、メハグリムには生活様式の意識的な否定は含まれず、移民の動機が専ら、元住んでいた国の経済的、政治的、あるいは宗教的状况が好ましくなかつたことに由来するのである。したがって、メハグリムは新しい国で新しい文化をつくりあげようとすることに関心なく、古い慣習を保持し必要最少限度において新しい環境に適応しようとする人々の移民が意味されているのである。イスラエルでは、アシケナージム(主としてヨーロッパからの移民)にオリムとしての、またセファルディム(主としてアジア・アフリカからの移民)にメハグリムとしてのレッテルが貼られているのである。

事実、この二つのユダヤ人集団のイスラエルへの移民の動機には大きな違いがあつた。イスラエル建国のもととなつたシオニズムは、一九世紀のヨーロッパにおけるナショナリズムの興隆と深い関係をもっており、かつドレフュス事件に典型的に表わされたようにヨーロッパ社会への同化をこころみることの空しさと、依然として存続する反セム主義が時として強化されることへの恐怖を背景としていたのである。シオニズムは、西欧化され解放されたユダヤ人の間で生まれたイデオロギーであつたことができる。一八九七年シオニストたちはスイスのバーゼルで第一回世界シオニスト会議を開き、初代会長にテオドル・ヘルツェルを選び「公法に基き安全を保障されたユダヤ人の郷土(Domus)」をパレスチナに建設することを採決したのである。一九二二年国際連盟によつてイギリスのパレスチナ委任統治の政策が正式に採決されたが、世界シオニス

ト機構はパレスチナにユダヤ人の郷土を建設するためイギリスの統治に協力し、ユダヤ人問題について勧告するための機関として選ばれた。しかしすべてのユダヤ人がシオニストであつたわけではないため、パレスチナへの移民やパレスチナでのユダヤ人の利害を代表する機関として「パレスチナのためのユダヤ機関」が設立された。この組織は、パレスチナへの移民の勧誘、ヘブライ語とヘブライ文化の復興、パレスチナの土地取得などが任務とされた。シオニズムを支えたヨーロッパのユダヤ人が、もし彼らの生活の物質的豊かさだけを追求するために移民を志すならば、北アメリカの方がはるかに成功の可能性が大きかつた。それでもなお、パレスチナを移民先に選んだ人々は、移民の動機がユダヤ国家の建設とユダヤ文化の発展に参加するという精神的満足の追求であつた——少くともタテマエとしてはそうであつた——のである。

世界シオニスト機構とユダヤ機関は、イギリスの中東政策が親アラブ化して行く中で、できるだけユダヤ人側に有利な条件をひき出そうと努力を重ね、またパレスチナにおいてはユダヤ人移民の社会にアラブ・ナシヨナリズムの発展に対抗しうる軍事力、生産力、人員などを確保するために必要な役割をはたしたのであつた。したがつて、イスラエル建国に至る歴史は、アシケナージムの努力と闘争の歴史であつたといふことができよう。この事實は一九三七年に提出されたイギリスの中東政策に関するピール委員会の報告書の中に、「ユダヤ人とアラブ人の間に共通項は何もない。アラブ人の社会はすべからくアジアの特徴を有し、ユダヤ人の社会はすべからくヨーロッパ的特徴を有している<sup>(19)</sup>」<sup>(18)</sup>という記述が存在することをみても明らかである。

他方、セファルディムのイスラエルへの大量の移民は、建国後であつた。しかしセファルディムのコミュニティは、シオニストたちがヨーロッパから移住してくる以前から、パレスチナに存在していた。そのコミュニティは上流階層と一般大衆にはつきりとわかれていた。上流階層の人々の教養はヨーロッパからの移民のバイオニアたちに比して極めて高いものであつたし、その教育は主として英語かフランス語でうけており、またアラビア語の知識もあつた。このため彼らは、イギリス

委任統治時代のパレスチナで、役人、弁護士、銀行家などの高い職業についている者が多かつた。彼らはシオニズムを、社会主義革命とナショナリズムという自分たちとはおおよそ関係のない主張であると、うけとつていたのである。<sup>(20)</sup>セファルディ・コミュニティの一般大衆は、無教育で貧困にあえいでいた。彼らはシオニズムに影響をうけたが、中でも右翼的色彩の強いレヴィ・ジヨニストの呼びかけに共感をおぼえる者が多かつた。一九四八年のイスラエル建国当時、イエーメンからの移民をふくめて、セファルディムの数は当時のパレスチナにおけるユダヤ人口のわずか一五パーセント以下にすぎなかつた。しかし、今日、彼らはイスラエルのユダヤ人口の過半数を越えようとしている。<sup>(21)</sup>このセファルディム人口急増の原因は、言うまでもなく一九四〇年代後半と、一九五〇年代にかけてのアラブ諸国からの大量の「エキソダス」であつた。

このエキソダスをひきおこした理由は、おおよそ二つ考えられる。第一にイスラエルの建国とその後の対アラブ諸国との紛争は、アラブ諸国にいたユダヤ人の立場をきわめて微妙なものにしたためである。彼らがイスラエルにユダヤ人国家として親近感をもつことや、イスラエルにいる親戚や縁者と関係をもつことは、アラブ人にとつては敵と通じている者として目に映つたのであり、アラブ国家にたいするまぎれもない不実の証拠だつたのである。ましてイスラエルを公然と支持しようものなら、裏切者としての烙印をおされ、きびしく排斥されたのである。国別により相違はあつたが、ユダヤ人がイスラエルに移民をみとめられた場合でも資産の持ち出しは利敵行為として規制されたのである。<sup>(22)</sup>このような状況の中で、多くのユダヤ人がアラブ諸国を離れた。<sup>(23)</sup>このエキソダスの第二の理由は、北アフリカのフランス植民地が一九五〇年代半ばから六〇年代はじめにかけて相ついで独立したためである。期待の増大を背景にもつたこの独立革命は、その後、政治、経済、社会の純アラブ化や社会主義化が急激に徹底してすすめられた。このため、フランス植民地支配下で「ミドルマン・マイノリティ」としての地位を達成してきたユダヤ人の生活基盤は大きくゆらぐことになつた。<sup>(24)</sup>このため、多くのユダヤ人が国を離れることになつたのである。

アラブ諸國を離れた人々のすべてがイスラエルへ移民したわけではなかつた。リップセットは、つぎのように記述している。「統計上のデータは、教育程度が高く資産をある程度もつた北アフリカのユダヤ人はフランスやカナダなどへ移民していったことを、示している。イスラエルが受け入れた移民は、教育のない貧困層が主だったのである。またトルコでは教育があり資産もあるユダヤ人はトルコを離れようとはしなかつた。ここでもイスラエルに移民したのは極貧層のユダヤ人であつた。貧しいユダヤ人がイスラエルへ移民を希望した理由の一つは、彼らの中に宗教的な人々が多かつたせいでもある。しかし、彼らは移民時にイスラエル政府が与えてくれることを約束した経済的保障や、その後の可能性に魅力を感じたことも事実であつた。フランスなどの先進國に移民していつた北アフリカ出身のセファルディムは、そこでイスラエルに移民するよりもはるかに大きな成功の可能性をみつけたのである。」<sup>(25)</sup>

セファルディムの大部分を占める北アフリカ出身者の、イスラエルへの移民の動機は、宗教的なものか社会主義的な経済上の保障か、或はその双方からであり、アシケネージムのようにイスラエルの国家建設や新しいユダヤ文化の創造に参加することは、タテマエとしてもほとんど見ることはできなかつたのである。

二つのユダヤ人集団の相違がイスラエル社会で顕著である第三の理由は、イスラエルが全世界のユダヤ人口の分布の中で、きわめて特殊な人口構成を示しているためである。イスラエルのユダヤ人口は一九七五年の人口統計によれば二九三万人であり、アメリカ合衆國のユダヤ人口約六〇〇万人、ソ連のユダヤ人口約三〇〇〇万人について、世界で第三位の規模に成長した。<sup>(26)</sup> アメリカおよびソ連のユダヤ人口のほとんどがアシケネージムであることを考えると、世界のユダヤ人口は圧倒的にアシケネージムが多い。ところがイスラエルでは、一九七二年の統計でみるとアジア・アフリカ系(四七・四パーセント)がヨーロッパ・アメリカ系(四四・一パーセント)を上まわつている。<sup>(27)</sup> イスラエルでのセファルディム問題は、「マイノリティ」問題というよりもむしろ「マジョリテイ」問題なのである。今後、世界情勢の突然の変化によりアシケネージム人口の急

激なイスラエルへの流入がないかぎり、出生率<sup>(28)</sup>からみてもイスラエル国内でのセファルディムはマジョリティとしての立場を一層強化してくるはずである。

この事實は、イスラエルをユダヤ国家として多少なりとも親近感をいだいているアメリカやヨーロッパのアシケナージムにとつて、きわめて目ざわりなのである。何故なら、彼らにとつてイスラエルのそのような現実をみることは、まさに自己嫌悪そのものなのである。アメリカ社会で、ユダヤ人というマイノリティの成員である者が、ユダヤ人集団のうちでアメリカ社会のマジョリティ(非ユダヤ人)側の高い社会層に類似していないようなユダヤ人の部分(低い社会層)にたいして示す嫌悪は、この部分(イスラエルに多数存在する非西欧的ユダヤ人)があるためにマイノリティ全体(ユダヤ人全体)がマジョリティから低い社会層の一部と見なされる危険があるのだという気持によつて増大<sup>(29)</sup>してくる。このような態度は、いうまでもなくイスラエルのアシケナージムにも伝染し、セファルディムにたいする自らの文化的優越性を極端に主張するようになるのである。つまり、ここに集団現象としてのユダヤ人のユダヤ人にたいする差別が顕在化する<sup>(30)</sup>。

以上の三つの理由から、今日のイスラエル社会は文化的、社会的に明らかに区別しうる二つのユダヤ人集団から構成されており、人口上のマイノリティであるアシケナージムが、マジョリティであるセファルディムよりも、全般的に高い社会層を構成しているためである。

## 二 イスラエル国家の潜在的な政治脆弱性

奇妙なことに、社会的、文化的亀裂がアシケナージムとセファルディムの間に存在していても、政治的亀裂は現在このラインにそつて存在しているわけではない。それはむしろシオニズム内のイデオロギー的基盤の相違に由来しているのである。イスラエルでは、国家成立以前にすでに多くの政党組織が存在しており、制度的に多元的な政治体系が構成されていた

のである。シオニストの中には、社会主義か非社会主義かの分裂に加えて、宗教的か世俗的かの分裂も加わつていた。ポアレイ・シオン党 (Po'alei Zion) はマルクス主義に立脚した社会主義を唱え、一九〇五年から六年にかけてロシア系ユダヤ人によつて創設された。そのパレスチナ支部は一九一九年に設立されアフダト・ハアボダ (Ahduth Ha'avadah) と呼ばれた。一方、非マルクス主義的な立場から社会主義を唱えたハポエル・ハツァール党 (Hapo'el Hatzair) も一九〇五年に設立されている。この二党は一九二〇年にパレスチナにおけるユダヤ人労働者を組織化し、ヒスタドルート (Histadruth) を創設し、一九三〇年には二党が合体してマパイ党 (Mapai) を創つた。また一九一三年には、ハシヨメール・ハツァール党 (Hashomer Hatzair) がより徹底したマルクス主義の立場で創設され、後にマバム党 (Mapam) となつた。宗教色の強いシオニストの政党としては一九〇二年にミズラヒ党 (Mizrachi) が、また一九二二年にハポエル・ミズラヒ党 (Hapo'el Mizrachi) が創設された。非社会主義シオニストの諸党には中道穏健派から右翼国粹主義派まで存在した。とくに後者は、一九二五年世界シオニスト機構の方針を軟弱であると批難して結成され、一九三五年新シオニスト機構を作り、独自の軍事組織イルグン・ツバイ・レウ ("Irgun Tzevai Leumi) を持つたのである。このようなイデオロギー的、制度的分裂は、イスラエルの建国以後の政治状況に大きな影響を与えたことはいうまでもない。

もちろん、イスラエル建国以前のパレスチナには、ユダヤ人の間に出身地域別に組織された互助組織が存在し、それらがいしばしば政治的活動をともなつたことも事実である。たとえば、アリア・ハダシヤ (Alia Hadasha) は一九三〇年代にドイツからきた移民で主として構成されていた互助組織であつた。またイエーメン出身のユダヤ人も自分たちの互助組織をもつていたし、それは後にヒスタドルート内の一組織としても認められた。さらに、シオニスト移住以前からパレスチナに住んでいたセファルディムを代表する組織も存在したのである。<sup>(1)</sup> このように互助組織の役割は同じ地域出身の日系移民がアメリカなどで県人会や頼母子講などを作つて移民の受け入れと定着を援助し、故郷に新たな移民の勧誘を行つたことと何ら違いは

なかつた。元來、パレスチナへのユダヤ移民は、世界シオニスト機構やユダヤ機関が、移民の受け入れや定着および移民の勧誘を行う機関として存在していたため、出身国別の互助組織や政党はそれほど強い必要性をもたなかつた。しかし、第一次世界大戦後、再びヨーロッパの政情が混乱しはじめ、同時にイギリスが親アラブ的立場に傾斜しパレスチナへのユダヤ人移民数を制限しはじめると、出身地域への移民許可割当をできるだけ多く獲得しようとして、出身地域別組織の活動は活発化したのである。イスラエル国家の成立後は、したがってこれらの組織の存在は必要のないものになった。

独立後、イスラエルではアラブ諸国のユダヤ人になりたいしても、ユダヤ機関などを通して移民の勧誘を行つたが、既に述べたようにイスラエルの独立後は多様な理由で多数のユダヤ人がアラブ諸国から離れる原因となつた。四〇年代後半から五〇年代をとおして、これらのアラブ諸国を離れたユダヤ人のうち、八〇パーセント以上がイスラエルに流入した。彼らはヨーロッパからの移民と異つて、シオニズム内のイデオロギー的基盤の相違による分裂に本来的にかかわりあいをもつていなかった。しかし、シオニズムの諸党派はこれら新しい移民をできるだけ多く傘下におくことが、勢力拡大に是非とも必要であつた。このため移民者たちは、イスラエルに到着した時点であらかじめ各政党間できりきりめつたワクに従つて、各政党のイデオロギー的管轄権の確立された漸定キャンプに入れられたのである。彼らがそこで政治的に社会化されていつたことは言うまでもない。たとえば、モロッコの一地方からの移民の場合、農村への定住については八〇パーセントをマバイ党が、二〇パーセントをハポエル・ミズラヒ党が分担した。<sup>(3)</sup>かくて、出身国別集団への所属と政党への所属は横断的となり、アシケナージ政党対セファルディ政党という対立は形成されなかつたのである。

この事実が逆に、イスラエルの政治的統合への潜在的な脆弱性を今日作つている点を見逃すことはできない。モロッコ出身で労働党所属の国会議員ベン・シムホンは、私とのインタヴューで次のように述べた。「一九五〇年代に北アフリカから移民してきたユダヤ人たちは、いまだにイスラエル社会に完全に統合されているとはいえない。その理由は、われわれが北

アフリカ出身だということに由来するとは思わない。だから、我々のイスラエル社会への完全な統合は、アッシュケナージム対セファルディムという二極対立的な枠組で考えることはできないのである。<sup>(4)</sup>しかし彼は北アフリカ出身者の声をより大きく政治に反映させる運動を勢力的に展開しているものであり、すでにエスタブリッシュされた者たちの組織であるセファルディック・カウンシルへの強い対抗意識をもっているのである。彼は北アフリカ出身者が独自の政党を作る意図のないことを強調しながらも、自分たちがイデオロギー的対立を克服して大同団結した組織を作るべきことを説いている。また、一九七二年から三年頃に盛んであつたイスラエルにおけるブラック・パンサー運動が、「アラブや被抑圧者と腕をくんで体制に決闘を挑む」というイスラエルにとつてきわめて過激な主張を行つたにもかかわらず、貧困層のセファルディム間に多くの共感者を与えた。それは、イスラエルにおける社会的価値配分の仕方への不満を、めぐまれたアッシュケナージムにたいする抑圧されたセファルディムという社会的、文化的亀裂のラインにそつて、政治的に（体制の問題として）主張することが、セファルディム間に大きな情緒的支持をひき出したことを意味している。ブラック・パンサーのある指導者は、彼がこの運動に参加する以前にイスラエルの社会的価値配分の仕方についての不満をつぎのように述べている。

シオニストたちはわれわれに「イスラエルこそ君たちの国だ。君たちもイスラエルに来て国家の建設に手をかけて欲しい」と語りかけた。だからわれわれはイスラエルに移民し、国家の建設を手伝つた。しかし眞実は、国家の建設がわれわれ（セファルディム）のためではなく、他人（アッシュケナージム）のためであつたのだ。われわれは唯イスラエルで、底辺の労働力として働かされてこられたのだ。<sup>(5)</sup>

このような思いは、多くのセファルディムが共通にもつていた不満であつた。すなわち、ここで問われたことは、数的なマイノリティであるにもかかわらず社会的価値配分に関してはるかに有利な立場に立つアッシュケナージムと、数的なマジョリティであるにもかかわらずきわめて不利な立場に立つセファルディムとの間で、社会的価値の配分の仕方における「公正さ」



とは何かの衝突であつたからだ。換言するならば、社会的価値の配分についてなされた政治的決定が権威をもつことは、その決定の方法 (methods) や手続 (procedures) が立脚している特定の規範 (norm) や基準 (standard) が、社会の大部分の構成員間で共有されている場合である。決定がこのような規範にのつとつた形で形成されるとき、成員はそれを権威あるものとして受け入れるのである。<sup>(6)</sup> たしかに「手続」としての権威は、服従を説明する一つの要因にすぎないが、しかし強制力や慣習や利害関係以上に、広く成員間に共有された権威についての認知 (cognition) は、政治体系の安定性 (stability) を高めることになるのである。<sup>(7)</sup> ブラック・パンサーがイスラエル社会に提示した問題は次のように要約できる。現在の規範にもとづいた政治的決定の手続では、公正な社会的価値配分がなされないと抑圧された側が明言したことである。一時的にもせよ、これにイスラエル社会の抑圧された側すなわちセファルディムの間にも多くの共感者が出た事實は、将来の政治紛争に二つのユダヤ人集団間の亀裂の存在が重大な影響を及ぼす可能性のあることを示している。イスラエルの政治的安定や政治的統合にとつて、この亀裂の存在は脆弱性を与える危険な潜在的要因であると考えられる。<sup>(8)</sup>

今日、イスラエルにおけるブラック・パンサーの活動は体制側からの封じ込めと内部矛盾の露呈によつて社会的影響力を完全に失つてしまつた。リップセットの指摘を再び引用すれば、「セファルディムは、政治的、社会的に劣勢な立場にあり、アシケナージムとの不平等に悩んでいるにもかかわらず、自らの政治的要求や利益を自らの手で実現させるための有効な組織を持たない」<sup>(9)</sup> 状況は、依然としてつづいている。しかしこの状況は抑圧されたセファルディム側からの社会的価値についての「公正」な配分とは何かを問うことによつて提起した政治的権威に関する基本的問題を、アシケナージム側が真剣にうけとめないまま、再びシンボル操作を通してセファルディムを現在の政治的規範の下につなぎとめることを可能にしたことを意味しているのである。

このような政治状況を再びゆるした別の原因は、セファルディム内部のサブ・グループ・ビングが根強く、集団としてのセファ

表 1

## Jews aged 14 and over, by principal everyday spoken language

Percentages

	Census 1972	Census 1961
TOTAL	100.0	100.0
Thereof: Speak hebrew as principal language	77.5	67.4
SPEAK PRINCIPAL <sup>1</sup> LANGUAGE OTHER THAN HEBREW—TOTAL	100.0	100.0
Arabic	22.2	25.8
Yiddish	18.8	23.9
Rumanian	13.0	9.3
German	5.9	6.9
French	7.4	5.3
Spanish	6.6	5.4
English	4.8	1.7
Hungarian	4.7	4.8

<sup>1</sup> Aged 15 and over.<sup>2</sup> Principal—only or first everyday language.

サブカルチャーの存在とナショナル・アイデンティティの形成

ルディ・アイデンティティを形成しにくいところにある。たしかに現在のイスラエルにおいて、平均的なセファルディム像を描き出すことはむづかしい。それは彼らの出身地域に主として関連する文化的相違が無視できない点にある。ここでは、彼らの間で集団的アンデンティティが形成されるのを阻害している要因として、日常会話語、教育程度、移民のモード、文化変容の達成度における相違をとりあげることにする。

第一に、セファルディム内の相違は、日常会話語により顕著になつてゐる。つまり、ヘブライ語以外に理解できる言語の相違が出身地域別に存在するのである。現在イスラエルのユダヤ人口中の、日常会話語の分布は表1のとおりである。セファルディムの多くは、アラビア語とフランス語を使用しているが、このほかラディノ(バルカンからのセファルディム)、トルコ語、ベルシャ語、モグラビ語(モロッコからのユダヤ人)が用いられている。このような日常会話語の相違はセファルディム内のサブグループへ連帯意識を強める機能を果している。<sup>(11)</sup>

第二に、彼らの内部的相違は出身国における教育程度の差により顕著になつてゐる。イエーメンやイラクからの移民は

教育程度が相対的に高く新しい環境への適応力が強かつたのにたいし、モロッコからの移民は教育程度が低く適応力が弱かつたとして指摘されている<sup>(12)</sup>。もちろん教育程度の相違は同じ出身国を持つ者の間にも存在する。たとえば、モロッコからの移民の間で、都市部出身者がアトラス山地出身者を蔑視する理由もこのためである。

第三に、彼らの内部的相違は、あるコミュニティの部分的移民か、全体的移民か、(移民のモードの相違)によつて顕著になる。イェーメンやイラクからの移民は、コミュニティ全体でなされたものが多かつた。したがつて彼らはイスラエルに来た後も、精神のおよび社会、経済的な両面における指導体制が維持されていたのである。このことが、新しい環境への適応に大きく役立ったことはいうまでもない<sup>(13)</sup>。他方、モロッコからの移民は、既に述べたように教育程度の高い者はフランスをはじめとする先進国へ移民し、教育程度の低い経済的に恵まれていない者がイスラエルへ移民してきた。したがつて、モロッコ系移民は最大の出身国別集団でありながら、精神的にも、社会、経済的にも指導者の欠如に悩んできたのである。このためモロッコ系移民の新しい環境への適応は円滑におこなわれなかつたのである<sup>(14)</sup>。

第四に、彼らの内部的相違はイスラエルで達成した文化変容の程度によつて顕著になつてゐる、たしかに、すべてのセファルディムが、今日、イスラエルの世俗化された西欧文化の影響をうけ文化変容の最中にある。イスラエル社会で、人口数からいえばセファルディムが多数を占めるようになった今日でも、支配的な文化は依然としてアシケナージムの文化である。つまり、セファルディムのイスラエルにおける文化変容とは、彼らのアシケナージム化が意味される場合がほとんどなのである。イスラエルのソーシャル・ワーカーたちの体験はこのことを明瞭に物語つてゐる。彼らはイスラエルのいたるところで、ほとんどすべてのセファルディムの家庭の子供たちがアシケナージムの行動様式を真似し、受け入れようとしてゐる事実を発見するのである。それは一般的にいえば、アメリカで黒人がパッシング(Passing)を試み、ディアスポラのユダヤ人が同化(Assimilation)を試みたのと同じ心理状態が、近代化、世俗化というかけ声のもとで、イスラエルのセ

ファルディムの中にひろがつているのである。その心理状態は、特権の少ない集団の成員がより特権の多い集団の一員となるために自らの集団を脱け出そうと努力することなのである。極端な場合これらの努力は、たとえばチュニジアからの移民がハンディック・ダンスを踊ることであり、宗教学校に通うモロッコからの移民の子供がタルムードを流暢なイディッシュで議論することとなつてあらわれてくる。しかし、アシケナージの行動様式を受け入れ同等の立場に立ちたいとするセファルディムの努力や願望は、現実の生活の中で決して克服することのできないギャップに直面してしまう。すなわち、彼ら  
が実際にどれ程見事にその努力目標を達成しようと、それを評価するのは彼ら自身でなくアシケナージムなのである。また、彼らが如何に強い同化の願望をもとうと、彼らの民族的（外見的）、歴史的背景（アジア・アフリカ系であつて、ヨーロッパ系でないという事実）は変えることができない。しかしそれにもかかわらず、セファルディム内部では、同化の達成度やバッシングの可能性の度合（あたかも外見的にヨーロッパ系にみえるということ）の高い者たちが、その度合の低い者たちを蔑視する傾向が強いのである。

セファルディムにとつて、サブグループ間の対立の存在と、それ故に能動的な意味での（positive）集団的なセファルディ・アイデンティティが形成しえない事實は、彼らをイスラエル社会のマジナルマンとしての地位におきつづけることになる。彼らは社会的に曖昧で不確定な存在となり、永続的な内的葛藤の状態におかれているのである。したがつて彼らは、彼ら自身の視座からの明確な社会的、政治的展望を持ちえない。それにもかかわらず、現実にはイスラエル社会で数としての多数を構成している。イスラエル議会の選挙結果の右傾化はこのことをよく反映しているように思われる。イスラエル国家の潜在的な政治脆弱性は、セファルディムとしての集団的アイデンティティが形成されないこと（現在の政治制度の機能の仕方をふくめて）にあるように思われる。

## 三 異なる下位文化の存在と国家レベルにおけるアイデンティティの形成について

クルト・レヴィンはマージナルマンについて次のように述べている。「いわゆる『二重の忠誠』を怖れてはならない。一つ以上の重なり合う集団に所属するということは、誰にとつても自然な、また必要なことである。ほんとうの危険は、しっかりと足を踏まえる『場所がない』こと——『境界人』<sup>ボーリナキヤン</sup>であり、(また『永遠の青年』である)という<sup>(1)</sup>ことにある。」ユダヤ人国家としてのイスラエル社会において、セファルディムはマージナルマンの地位におかれている。しかしあらゆるユダヤ人は、ディアスポラの状態においてマイノリティであつたし、ユダヤ人と非ユダヤ人という二つの社会集団間の境界を横切りつつあるユダヤ人は、明らかにマージナルマンとしての内的葛藤に悩みつつづけてきたのである。ところがイスラエルにおいてはこの状況は大きく変化した。ここではユダヤ人がマジョリティを占めたのである。

ディアスポラにおいて、ゲットーから解放された後のユダヤ人は、「高度に分離された全体」<sup>(2)</sup>になつた。すなわち「ゲットー時代以来、集団としてのユダヤ人に加えられていた圧力は弱まつたが、一方では分散の過程が進展した結果、外部からの諸力の作用が集団から個人に移行することになつた。そこで外部から集団全体にかかつてくる圧力は弱まつているにもかかわらず、個人としてのユダヤ人にかかつてくる圧力は相対的に増大するという現象がおこつた」<sup>(3)</sup>のである。このような状況において、ユダヤ人は自分の周囲にいる人間がユダヤ人か否かに常に注意を払い、もしその人間がユダヤ人でないなら、その人は自分がユダヤ人であることを気がついているか、またそのことが彼と自分との人間関係にどのような影響を及ぼしているかを問いつづけていかなければならなかつた。したがつて、ディアスポラのユダヤ人のアイデンティティは、マジョリティの非ユダヤ人との相互作用の中で、すなわちその社会の一員としてのアイデンティティ(たとえばアメリカ人とカドイッ人としての)と、ユダヤ人としてのアイデンティティとの葛藤の中で形成されていつたのである。

イスラエルにおいては、ユダヤ人であることは自明の事である。アイデンティティの形成がこの二つのどちらに重点がおかれよう<sup>(4)</sup>とこの二つのアイデンティティは容易に協調 (Consonance) しうるものと考えることができる。ただし、その際、ディアスポラの歴史をどのように評価するかが、アシケナージムとセファルディムのイスラエリ・アイデンティティの内容の相違をもたらしているように思える。すなわち、イスラエル人としての自分をディアスポラの過去との連続において考える<sup>(5)</sup>のか、或は現在の自分たちの国家を持つた状態を過去のユダヤ国家の歴史に直接結びつけて (ディアスポラの歴史を意図的にとび越して) 考えるかである<sup>(6)</sup>。現在のイスラエルにおいて、もし二つのユダヤ人集団のイスラエリ・アイデンティティ (国家レベルでのアイデンティティ) が完全な形で一致する場合があるとすれば、それはディアスポラの歴史を意図的にとび越えて形成されたときである。なぜならセファルディムにとつてヨーロッパでのユダヤ人迫害の歴史は決して自分たちの歴史ではなく、またアシケナージムにとつてアジア・アフリカにおけるユダヤ人の歴史に感情移入することは極めて困難であるといわざるを得ない<sup>(7)</sup>。それにもかかわらず、現在のイスラエルの社会化の過程で教えられるユダヤ人の歴史には、アシケナージムのディアスポラの歴史が大きなウェイトを占めているのである<sup>(8)</sup>。ほとんどのアシケナージムは、それを当然の事としてうけとつている。その理由の第一に、彼らはイスラエル建国の契機はアシケナージムの歴史の中から生まれたものであること、第二にユダヤ文化の真髄を維持発展させてきたのは自分たちであることをかかげる。たとえばシーセル・ロスは「ユダヤ人の歴史」 (A History of The Jews) の中で、次のように述べている。

「東洋でもビザンチン帝国、メソポタミア、アラビア、エジプト、ペルシャ、あるいはさらに遠く東へ、インドや中国でもユダヤ人社会は存続して、その数も無視できないほどになつていた。しかしながら、ユダヤ人の生活や世界の文明における彼らの重要性は、決定的なものとはなり得なかつた。人類の歴史に何事かを、そしてまた、ヘブライ文化の歴史に最も多く寄与したと見られた一部のユダヤ人は、これ以後は常にヨーロッパ——ヨーロッパの文化、ヨーロッパ的見地、そして少な

くとも長い年月にわたつてヨーロッパの土と結びついていた。<sup>(9)</sup>」

したがつて、セファルディムがアシケナージムに匹敵するゆるぎないイスラエリ・アイデンティティを形成しうるのは、ディアスポラの歴史を意図的にとび越えて過去のユダヤ国家の歴史に直接自分たちをむすびつけるかぎりにおいてであり、またイスラエル建国の契機ではなくて現在のイスラエル国家が中東でおかれている状況の重視をおしてである。換言すれば、アシケナージムと共有しうる運命共同体の一員としての自分たちなのである。

それにもかかわらず、現在、アシケナージムによる一元的なイスラエリ・アイデンティティの強制(同化の強制)がなされていることは、国家レベルでのアイデンティティの形成が変則的に行われていると言わざるをえない。またそのようにして形成されたイスラエリ・アイデンティティは常に崩壊する可能性をかかえている。しかもこの可能性は、歴史的過去の評価の相違のみならず、二つのユダヤ人集団の相違を特徴づけている社会、経済、文化、外見など既に論述した諸要因によつて一層拡大されるのである。

現在のイスラエルに存在する下位文化の相違のなかで、アシケナージム集団とセファルディム集団の下位文化の相違は、イスラエルの国家レベルの政治統合にとつて最も危険な要因の一つでありながら、今まで大きな政治紛争の原因となつてこなかつた。それにはイスラエルの政治制度が、下位文化間の相違や対立を各政党組織の中に分断することによつて、イスラエルの政治過程を権威づけている政治的規範の中で処理することができて来たからである。しかし、ダールが指摘するように、「下位文化の相違をまき込んだ政治紛争は、通常の議會をとおしての反対表明や政治的かけひき、さらに議會外でのキャンペーンの展開や選挙による勝利などによつて処理するのには、あまりにも政治問題として紛争の火種を宿しすぎている」<sup>(10)</sup>のである。イスラエルの国家レベルでの政治統合は、将来、下位文化間の相違のラインにそつた争点をめぐつて政治的紛争がおこつた場合、そしてそれが従来の政治規範によつては権威的に解決がなされなかつた場合、きわめてもろいものであ

る可能性が大きい。ダールは、下位文化間の相違に立つた政治的紛争が処理される主要な仕方として次の六つをかかげている。すなわち、①力による抑圧 (Violence and Repression) ②分離 (Secession or Separation) ③現状変更をめざす政策への拒否権の相互発動 (Mutual Veto) ④自治 (Autonomy) ⑤比例代表 (Proportional Representation) ⑥同化 (Assimilation) である。しかし、私はあえて、ダールの処理方法をさらに一つをつけ加えたい。それは、⑦必ずしも多数決原理にもとづかず、各下位集団の集団としての平等を前提とした合意的解決 (Consensual Solution) である。なぜなら、多様な下位文化をその中にふくまざるを得ない集団は、多様な成員間にその集団の成員としてのアイデンティティを、成員間の同質性や類似性を前提としては形成しえない場合があるからである。このような状況の中での上位集団の成員としてのアイデンティティは、相違を前提とした下位文化間の相互依存 (Interdependence) により形成されることを、拙稿におけるイスラエル社会の事例研究は示しているように思える。

#### 注

#### 序

(一) Aba Eban, "The Refugee Problem (1956)" in Walker Laqueur ed., *The Israel-Arab Reader*, Mazer Inc. New York, 1968, p. 159.

(二) アイデンティティという言葉の使い方は多様である。それは次の二つに分類できよう。①個人のアイデンティティの発展——シンセサイズ——をさす場合。たとえばエリックソンのエゴ・アイデンティティの研究など。②集団や組織の成員が成員である以上互いに共有しあう固有の価値に同一化するという意味でのグループ・アイデンティティをさす場合。たとえばハイの「移行社会において、社会化のプロセスが国民に明白なアイデンティティのセンスを付与することには失敗した」ということは、「とりもなほせずその国民の持つ政治文化の不安定さを反映している」という指摘など。Lucian Pye, *Politics, Personality and Nation-Building*, Yale Univ. Press, New Haven, 1962, p. 33. 拙稿でもこの「メンバー・アイデンティティ」を論ずるが 274 頁。

#### 一 イスラエル社会の構造的特質

(1) イスラエルにおいて、アシケケナーシムとセファルディムを分けている要因の一つにイデーディッシュが話せるか否かがある。アシケケナーシムにとってイデーディッシュをしゃべれるということは、彼らの集団帰属を確認する有効な手段の一つである。

サブカルチャーの存在とナショナル・アイデンティティの形成



サブカルチャーズの存在とナショナル・アイデンティティの形成

三三六 (一七九〇)

- (2) シーセル・ロスは次のように述べている。十四世紀末になると、スペインの暴動を逃れてきた避難民たちのため、北アフリカのユダヤ人たちは、新しい生活に目覚めることとなった。従来の居住者たちはこの新しい移民の数と学問と指導力の前に圧倒され、やがてスペインのラビの権威が、彼らの間で広く認められることとなった。さらに一四九二年の追放以後はその数はますます増加した。アフリカの北海岸に沿って、タンジールからカイロまで、また内陸はメクネスやフェズに至るまで、数万に上る避難民が定住した。(シーセル・ロス著 長谷川真ら訳「ユダヤ人の歴史」みすず書房 一九七一年。一八〇頁)

- (3) ヘブライ語→英語辞典にみられるアッシュケナージの対語としてのセファルディの指摘は、このことを明瞭に物語っているといえよう。

German, Eastern European אַשכּנזי

Jew; (as opposed to Sephardi) Ashkenazi

Ashkenazi accent, Ashkenazi קוּבּוּ אַשכּנזי הַרְבּוּ

Pronunciation (method of pro-פּוּרְטַגַּל

nouncing Hebrew different from the Sephardi, or modern Hebrew system)

- (4) 現在、イスラエルのユダヤ教本山(チーフ・ラビネイト)には、アッシュケナージ系とセファルディ系の二人のチーフ・ラビがいる。セファルディ系のチーフ・ラビはイッハック・ニシムでイラク生まれである。従って、厳密な意味では彼はセファルディとは呼べない。今日ではこの拡大したセファルディムと同じ意味をもつ言葉として、Oriental Jew, Jews from Arab or Islamic Countriesなどが使われている。以後、拙稿でセファルディムという言葉を使うときは、この拡大された意味である。

- (5) 建国以前のパレスチナにおけるユダヤ人組織の形成と対立の歴史は、このことを明瞭に物語っているものであるが、拙論ではこの歴史を詳しくとりあげない。

- (6) 宗教的か世俗的かの対立もイスラエル社会で大きな問題となつている。イスラエル社会で宗教戒律の厳格な遵守者はダタイ (Dati) とよばれる。ユダヤ教の伝統への積極的志向をもつが、戒律の厳格な遵守者とはいえない者はミソラタイ (mi-sorati) とよばれる。また宗教的戒律を全く無視する世俗的な者はロ・ダタイ (lo dati) とよばれる。

- (7) マトラスによれば、一般的な産業化のモデルは次のとおりである。経済成長や技術革新によつて産業構造の変化がもたらされ、職業構成が変化する。その結果、その変化にみ合つた労働力の補充がなされるので、職業間移動がおこなわれる。しかし、イスラエルの場合は、移民を吸収するための公共投資によつて人々の間に職業間移動をもたらす条件がまずととのえられ、その後、産業構造が変化したのである。Judah Matras, Social Change in Israel, Aldine Publishing Com., Chicago 1965, p. 169.

- (8) イスラエルのブラット・マンサーは次のように主張している。高級官僚の「二等級から三等級までの三〇〇人のなかで、アジア・アフリカ系ユダヤ

人はわずか九人にすぎない。」(板垣雄三編「アラブの解放」平凡社、昭和四九年、三〇〇頁)。またハイファ大学のマムーハ博士は次のように報告している。政府のトランプトラスをみると、「フシケテナージが二五人にたいしセファルデーはたったの一人である。イスラエルのパウリー・エリートたちの中でセファルデーの占める割合は一〇パーセントないし一五パーセントにすぎない。」(The Jerusalem Post, August 17, 1976)

(6) 一九七四年現在のイスラエルのユダヤ人口中、高等教育を外国で終ってきた者の数を比較してみても、この事実が容易に推測するところだがである。

Place of receiving post-secondary diploma	per cent
Israel	79.6
Arab—total	20.3
Asia-Africa	2.5
Europe	15.9
America and Oceania	1.8

(9)

Families, by size of family, head of family's continent of birth, period of immigration and population group  
Average 1975

Continent of birth and period of immigration	Average size of family	Persons in family (percentages)						Total (thousands)		
		7+	6	5	4	3	2		1	Total
ALL FAMILIES	3.7	10.5	6.2	12.3	18.6	16.6	22.6	13.1	100.0	887.8
JEWIS—TOTAL	3.5	7.3	5.7	12.5	19.4	17.4	23.9	13.3	100.0	810.8
Israel born—total	3.5	3.5	5.3	14.8	26.4	21.2	16.0	12.7	100.0	167.1
Father born in Israel	3.5	3.0	8.0	15.0	22.7	21.0	16.7	13.7	100.0	30.0
Father born in Asia-Africa	3.8	8.6	6.4	15.4	22.7	21.3	16.4	9.3	100.0	40.9
Father born in Europe-America	3.3	1.3	4.1	14.6	29.4	21.1	15.6	14.0	100.0	95.9
rica										
Born in Asia-Africa—total	4.5	18.2	10.4	17.0	18.0	13.2	14.1	9.1	100.0	269.6
Born in Europe-America—total	2.8	1.0	2.4	8.2	17.4	18.9	34.6	17.6	100.0	372.9

サブカルチャーズの存在とナショナル・アイデンティティの形成

サパカルチャースの存在とナシヨナル・アイデンティティの形成

(11) 北アフリカのユダヤ人の職業は、職人、商人が主であり、金融業に従事してゐた者もあつた。農業に従事してゐた者がいないわけではなかつたが、あつて例外的であつた。(Dorothy Willner, *Nation-Building and Community in Israel*, Princeton Univ. Press, New Jersey, 1969 pp. 257~260)

(12)

University graduates and holders of post-secondary diplomas,

by demographic characteristics and education

	Holders of post secondary diplomas 1974	University graduates				1961
		1974				
		Third degree	Second degree	First degree	Total	
Absolute numbers						
TOTAL	78,628	4,402	31,511	60,699	96,728	36,012
Jews	75,665	4,362	31,063	59,347	94,888	35,658
Non-Jews	2,963	(40)	448	1,352	1,840	354
Percentages						
TOTAL	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
Continent of birth and period of immigration (Jews)						
Israel	44.3	32.6	20.7	40.6	33.6	13.5
Born abroad—total <sup>1</sup>	55.7	67.5	79.3	59.3	66.4	86.5
Asia-Africa	14.4	5.7	4.4	8.9	2.3	6.1
Thereof: immigrated up to 1960	12.0	(4.0)	3.3	6.2	5.1	6.1
Europe-America	41.1	61.5	74.4	47.0	56.8	80.4
Immigrated up to 1960	33.1	46.9	43.0	33.0	37.0	80.4
1961-1968	5.2	5.2	13.8	8.5	10.0	—
1969-1972	2.8	9.4	17.6	5.5	9.2	—
Percent origin Asia-Africa <sup>2</sup>	19.0	6.9	5.0	10.2	8.3	6.6

(31)

Indicators for the Ethnic Gap in  
Post Primary and Higher Education

Grade or Type of School	Year	Percentage of Eastern Students In Population Among at Large			Indicator
		Students	Among	Students	
Primary Education	1967	46.3	35.6	-10.7	
	1972	56.6	46.1	-10.5	
9th Grade	1967	46.3	45.3	-1.0	
	1972	56.6	57.0	+0.4	
12th Grade	1967	46.3	18.9	-27.4	
	1972	56.6	34.8	-21.8	
Acad. High Schools	1967	46.3	25.4	-20.9	
	1972	56.6	32.0	-23.7	
Vocational High Schools	1967	46.3	47.0	+0.7	
	1972	56.6	58.1	+2.4	
Recipients of Mat. Cert.	1967	46.3	12.6	-33.7	
	1972	56.6	20.8	-34.9	
University Students	1967	55.0	12.2	-42.8	
	1972	49.1	14.1	-35.0	

[1974: THE EDUCATIONAL SYSTEM THROUGH NUMBERS, Jerusalem  
(August) Hebrew.]

Chaim Adler et. al, The Education of the Disadvantaged in Israel, The Hebrew Univ. of Jerusalem, Summer, 1975 p. 49.

(14) イスラエル応用社会科学研究所のチョナ・シレンは、その理由を大家族について授業料が高く生活費がかなり多いためであるとしている。彼女は中途退学を救う方法の一つは家族計画の推進にあるとしている。

(15) The Jerusalem Post, August 12, 1976.

(16) Chaim Adler et. al, op. cit., 187 参照

(17) 中東に関して、イギリス外務省より五つの白書が一九二二年から一九三九年の間に出されている。一九二三年の白書はチャールズ白書とよばれ、ハルフォア宣言がパレスチナをユダヤ人国家にするとは約束していないこと、パレスチナに自治政府を作る援助をすること、ユダヤ人移民を経済的に吸

サブカルチャーズの存在とナショナル・アイデンティティの形成

取可能な数におさえることが示された。一九二八年にイギリスの植民地相によつてメモランダムが発表されたが、これも白書とよばれることがある。この中では、なげきの壁への通行権と折りの形態はオスマン帝国時代の現状維持がなされるべきだとした。一九三〇年の白書は、イギリス信託統治がアラブ側とユダヤ側の両方の主張を満足させねばならないことを確認し、ユダヤ人の移民とパレスチナの経済的吸収能力によりきびしく制限することを述べている。シオニストがイギリスへ働きかけた結果、一九三二年ワイスマンへあてたマクドナルド書簡で、イギリスはユダヤ人移民の制限をゆるやかにした。一九三七年の白書では、ピール委員会の報告をとり入れて、パレスチナを三分割する計画を述べたが、一九三八年にこの計画は撤回された。一九三九年の白書は、ユダヤ人移民の数を将来の五年間で七五、〇〇〇人に制限すること、ユダヤ人のパレスチナにおける土地購入の制限、アラブ人口が多数を占める条件での一〇年後のパレスチナの独立などを示している。この白書の内容は、イギリスが統治を放棄するまでの基本路線となつた。

(18) 一九三六年にはアラブ最高委員会の指令によりパレスチナにおけるマラブ労働者のゼネストがおこなわれ、アラブ人の蜂起が組織化されるようになった。

(19) Walter Laqueur ed, *The Israel-Arab Reader*, Mazer Inc., New York 1970, p. 57.

(20) イシタケナジムの中に「エルサレムのメッシュリムで嚴格にオーソドックスの生活様式を守りつづけている人々は、シオニズムを世俗的演習行為と考へ、自分たちとは無関係と考へてゐるのである」。

(21) Continent of birth, period of immigration and religion

	Percentages					
GRAND TOTAL	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
Jews	84.7	85.0	85.2	85.4	88.7	82.1
Non-Jews	15.3	15.0	14.8	14.7	11.3	17.9
JEWIS—TOTAL	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
Israel born—total	50.9	49.6	48.4	47.3	37.8	35.4
Father born: Israel	10.3	9.7	9.1	8.4	5.5	8.1
Asia	13.1	12.9	12.8	12.6	14.9	..
Africa	11.2	10.8	10.4	10.0	..	..
Europe-America	16.3	16.2	16.1	16.3	17.4	..
Born in Asia	10.4	10.7	11.1	11.8	15.5	..
Born in Africa	11.7	12.0	12.4	13.0	11.9	1.7
Born in Europe-America	27.0	27.7	28.1	27.9	34.8	54.8
	31 XII 1975	31 XII 1974	31 XII 1973	19V 1972	22V 1961	8XI 1948

(2) 出生大陸別ユダヤ人移民

	アメリカ・ヨーロッパ		アジア		無国籍	総計
	オセアニア	%	アジア	%		
1919-14, 5.48	385,066	89.6	44,809	10.4	22,283	452,158
15.5.48-1951	334,971	50.3	330,456	49.7	18,774	648,201
1952-1954	11,187	21.9	39,978	78.1	28	51,193
1955-1957	49,630	30.9	110,714	69.1	617	160,961
1958-1960	46,460	64.2	25,926	35.8	7	72,393
1961-1964	86,748	39.4	133,561	60.6	14	220,323
1965-1969	48,609	46.5	56,035	53.5	311	104,955
旅行者定住 <sup>1</sup>	17,414	60.2	11,491	39.8	367	29,272
1969-1970 <sup>2</sup>	44,154	59.7	29,978	40.3	600	74,372
15.4.48-70 <sup>2</sup>	621,865	46.3	723,073	53.7	20,413	1,365,351

1. 15.5.48-1968

2. 旅行者と一時的居住者の定住を含む

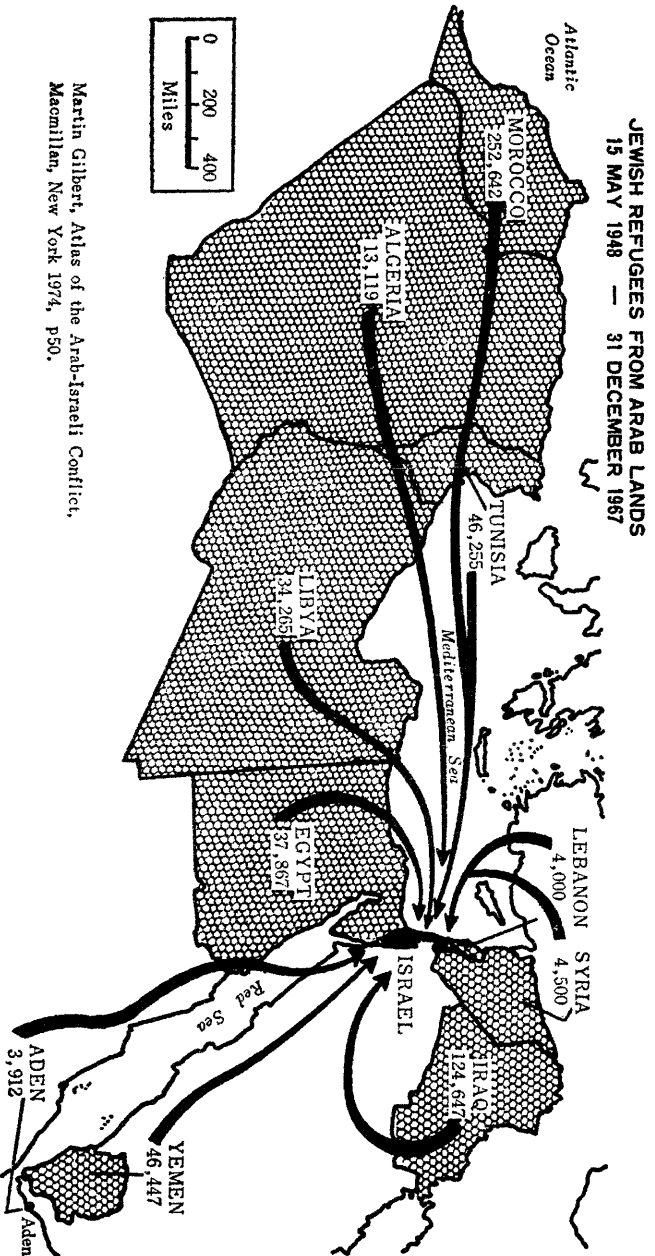
資料「イスラエルという国」イスラエル大使館発行 昭和49年 p. 75.

Jews in the Middle-East estimate for 1917-66 (Thousand)

Country	1917	1947	1968
Iraq	85	125	2.5
Egypt	60	66	2
Yemen and Aden	45	54	0.5
Syria	32	19	3
Lebanon	3	6	3
Libia	25	35	-
Total, Arab Countries	250	305	11
Turkey	100	80	37
Iran	75	100	70
Total in the Region (Outside Israel)	425	485	118

サブカルチャーズの存在とナショナル・アイデンティティの形成

- (27) Y. Harkabi, Arab Attitudes to Israel, Israel Univ. Press, Jerusalem 1972, p. 293.
- (28)



Martin Gilbert, Atlas of the Arab-Israeli Conflict,  
Macmillan, New York 1974, p.50.

- (29) Harold Flender ed., The Kids who went to Israel, Schuster Inc., New York 1973, p. 112.

(25) S. M. Lipset, "Israel Dilemma" in Israel: Social Structure and change, Transaction Books, New Jersey, 1973, pp. 351~352.

(26) 「イスラエル国家」前掲巻五五頁。

(27) Country of birth (for Israel born-father's country of birth)

Grand total	2,686,701	100%
Asia-total	655,921	47.4%
Africa-total	617,899	
Europe-total	1,133,409	44.1%
America and Oceania-total	53,626	
Israel-father born in Israel	225,846	

(28)

Reproduction rates of Jews, by mother's continent of birth

Gross reproduction rate Jews					Reproduction rate—Jews		
Europe-America	Asia-Africa	Israel	Total		Net	Gross	
1.55	2.17	1.73	1.66	1949	1.42	1.87	1926-1927
1.59	2.76	1.91	1.89	1950	1.33	1.62	1928-1930
1.54	3.06	1.73	1.95	1951	1.18	1.50	1931
1.48	3.02	1.63	1.93	1952	1.07	1.35	1932
1.39	3.01	1.56	1.88	1953			
1.28	2.75	1.40	1.74	1954	1.08	1.28	1933
1.28	2.77	1.38	1.77	1955	1.08	1.29	1934
1.27	2.73	1.35	1.77	1956			
1.26	2.64	1.37	1.76	1957	1.13	1.32	1935
1.20	2.40	1.32	1.65	1958			
1.13	2.56	1.35	1.69	1959	1.09	1.27	1936
1.20	2.50	1.32	1.70	1960	1.02	1.14	1937
1.16	2.35	1.31	1.63	1961	1.07	1.19	1938
1.13	2.27	1.26	1.60	1962			
1.16	2.24	1.34	1.63	1963	0.98	1.09	1939
1.24	2.22	1.38	1.66	1964	1.03	1.17	1940
1.26	2.23	1.41	1.68	1965			
1.19	2.17	1.35	1.65	1966	0.94	1.06	1941
1.16	2.04	1.31	1.55	1967	1.07	1.20	1942
1.28	2.09	1.38	1.63	1968			
1.32	2.04	1.43	1.64	1969	1.42	1.58	1943
1.38	1.97	1.52	1.65	1970			
1.42	1.97	1.55	1.67	1971	1.44	1.67	1944
1.33	1.85	1.42	1.54	1972	1.61	1.72	1945
1.29	1.80	1.44	1.51	1973	1.54	1.67	1946
1.35	1.79	1.49	1.54	1974			
1.37	1.83	1.49	1.55	1975			



(29) タルト・レヴィン 末永俊郎訳「社会的葛藤の解決」創元社 昭和二十九年 二三―四頁。

(30) 歴史的にアッシュケナージム内には、このような集団的自己嫌悪を示すことがしばしばあった。東欧のユダヤ人になりたいするドイツ或はオーストリアのユダヤ人の感情、ドイツのユダヤ人になりたいするフランスのユダヤ人の敵対感情はよい例である。

二 イスラエル国家の潜在的政治脆弱性

(1) Dorothy Willner, op. cit., p. 72.

(2) ATOの元議長アハバ・シケイリはシオニズムが移民する必要のないユダヤ人をイスラエルに移送したとして、次のように述べている。

「彼らはシオニズムによって頼まれた、移住させられたのである。イラク、シリア、エジプト、チュニジア、モロッコなどアラブ世界のどのような所でも、ユダヤ人に対する迫害がなされた。したがって出国する必要がなくなったのである。」(Statement to special committee of the U. N. general assembly, Nov. 5, 1963)。イスラエルのブラックスンサーは、イスラム諸国出身者がアラブを憎んでいるという点とはながと次のように述べた。

「われわれがまだイラクやモロッコに住んでいたとき、いろいろな手段を使つてわれわれのうちに、アラブへの憎しみを育んだのはイスラエルの政府だ。イラクではユダヤ人はアラブ人と隣りあつて、平和と相互信頼のうちに暮らしていた。シオニストの使者がやつてきてユダヤ人群衆めがけて爆弾を投げ、われわれとアラブとの間に不和の種を蒔いたのだ。」(前掲「アラブの解放」三〇二頁)

(3) Dorothy Willner, op. cit., p. 308。また「イギリスは、特定政党への支持と非支持を、出身国の相違なくみあわせて、①特定政党支持者間の同一国出身者の割合 (proportion voting for party j among all persons born in country i) と、②同一国出身者間の特定政党支持者の割合 (proportion born in country i among all persons voting for party j) を、次の表のように表示している。(一九六一年の投票結果による)

ESTIMATED PROPORTIONS VOTING FOR THE RESPECTIVE PARTIES IN EACH COUNTRY OF BIRTH CATEGORY

PARTIES	COUNTRIES OF BIRTH				
	<i>Iraq</i>	<i>Morocco,</i> <i>Algeria,</i> <i>Tunisia</i>	<i>Rumania</i>	<i>Poland,</i> <i>USSR</i>	<i>Germany,</i> <i>Austria</i>
<i>Majdi</i>	.08	.47	.58	.36	— .06
Religious Parties	.68	.20	.24	— .06	— .62
<i>Hervit</i>	.36	.27	— .38	.05	— .55
Liberal Party	— .11	— .14	.30	.43	2.83
All Parties*	(1.00)	(1.00)	(1.00)	(1.00)	(1.00)

ESTIMATED PROPORTIONS FROM AMONG THE RESPECTIVE COUNTRY OF BIRTH CATEGORIES  
IN THE TOTAL VOTE FOR EACH PARTY

PARTIES:	COUNTRIES OF BIRTH					
	Morocco, Algeria, Tunisia	Rumana	Poland, USSR	Greece, Austria	All Countries*	
<i>Mapai</i>	Iraq	.44	.23	.29	.01	(1.00)
Religious Parties		.39	.15	-.10	.01	(1.00)
<i>Herut</i>		.75	1.03	-.66	-.11	(1.00)
Liberal Party		-.27	-1.03	2.04	.30	(1.00)

① の数値の算定方法は以下のとおりである。

PLACE OF BIRTH BY PARTY VOTE IN 1961 ELECTIONS

$$\textcircled{1} = \frac{A}{A+B}$$

	Born in Country i	Not Born in Country i	Total—All Places of Birth
--	----------------------	--------------------------	------------------------------

Voting for Party j	A	B	A+B
-----------------------	---	---	-----

$$\textcircled{2} = \frac{C}{A+C}$$

Not Voting for Party j	C	D	C+D
Total—Voting for All Parties	A+C	B+D	A+B+C+D

- (4) 一九七七年三月二二日、エルサレムのハイット、ハファクロンにてインタビュー
- (5) Harold Flender ed., op. cit., p. 62.

サパカルチャーニースの存在とナショナル・アイデンティティの形成

- (6) S. M. Bre' and Adam Uram, *Patterns of Government*, Random House, New York p. 33.
- (7) *Ibid.*, p. 34. 『さむらい権威は「手統」の面だけでなく「目的の面」(政治的決定は何のためになされるのか)でも考察しなければならない。』
- (8) P. L. O.の宣伝もこの点を鋭くついている。P. L. O.は北アフリカ出身のユダヤ人を「アラブのユダヤ教徒」とよび、ヨーロッパ系ユダヤ人を「非アラブのユダヤ人」とよんでいる。
- (9) S. M. Lipset, "The Israeli Dilemma," in M. Curtis and M. Chertoff eds., *Israeli Social Structure and Change*, Transaction Books, New Jersey, p. 350.
- (10) 今日のイスラエルで社会的キズナとなつているシンボルには次のようなものがある。  
 ①戦争再発の恒常的危機——アンケケナーシム対セファラルディムの対立を抑えている——、②イスラエル国防軍——すべてのイスラエル人にとつて誇りの源——、③アラブ住民の存在——彼らにたいしてセファラルディムはしばしばフラストレーションや不満をぶつける——、④共通の宗教としてのユダヤ教——今日では世俗化された人間が多くなりつつあり、このキズナは弱まりつつある——。(Celia Heller, "The Emerging Consciousness of the Ethnic Problems among the Jews of Israel" in M. Curtis and M. S. Chertoff eds., *op. cit.* pp. 313-332)
- (11) イスラエルでは、ラジオのニュース放送がヘブライ語以外に次の言語でなされている。イディッシュ語、英語、ロシア語、ハンガリア語、スペイン語、ラディノ語、モグラビ語、ベルシヤ語、さらにアラビア語は独自のチャンネルをもっている。新聞、雑誌では、放送言語のほかにドイツ語、ブルガリア語、ルーマニア語で発行されている。
- (12) たとえばThe Jerusalem Post, Nov. 4, 1975.
- (13) ブルガリアからの移民がコミュニティ全体でなされた典型である。彼らはブルガリアにおいて中流階級の者が多く、今日のイスラエルで最も多く医師や歯科医師を出している集団であるといわれている。(Shlomo Avineri, "Israeli: two nations?" in M. Curtis and M. S. Chertoff eds., *op. cit.*, pp. 287~288.

—Jews, by country of birth  
20 v 1972

Country of birth (for Israel born— father's country of birth)	Born abroad	Israel born	Total
<b>GRAND TOTAL</b>	1,414,368	1,272,333	2,686,701
<b>Asia—total</b>	316,129	339,792	655,921
<b>Thereof: Turkey</b>	49,481	39,600	89,081
Syria and Lebanon	16,564	18,758	35,322
Iraq	114,263	125,050	239,313
Yemen and Southern Yemen	57,698	97,236	154,934
Iran	52,312	44,805	97,117
India and Pakistan	18,379	8,599	26,978
<b>Africa—total</b>	348,850	269,049	617,899
<b>Thereof: Morocco and Tangier</b>	225,133	153,990	379,123
Algeria and Tunisia	55,227	46,417	101,644
Libya	29,861	39,288	69,149
Egypt and Sudan	33,735	27,510	61,245
<b>Europe—total</b>	707,931	425,478	1,133,409
<b>Thereof: U.S.S.R.</b>	102,313	64,509	166,822
Poland	209,476	150,956	360,432
Rumania	204,672	77,920	282,593
Bulgaria and Greece	42,096	29,152	71,248
Germany and Austria	53,407	42,286	95,693
Czechoslovakia	25,556	19,807	45,363
Hungary	29,224	20,809	50,033
<b>America and Oceania</b>	41,458	12,168	53,626
<b>Israel—father born in Israel</b>	—	225,846	225,846

(15) したがって、リーダーを作り出すことがモロッコ系移民を社会的に適應させる上で必要と考えた。そこで一九六〇年代初め、首相ベン・グリオンは、フランスの大学にいるモロッコ系ユダヤ人の青年を、イスラエルにいるモロッコ系移民の指導者として移入することをこころみた。この移民勧誘運動をオデッド (Odedd) = encourage の意のヘブライ語(15)という。

三 異なる下位文化の存在と国家レベルにおけるアイデンティティの形成について

(1) クルト・レヴィン、前掲訳書 二四六頁。

(2) 同書 二〇〇～二〇二頁。

サブカルチャーの存在とナショナル・アイデンティティの形成

サブカルチャーズの存在とナショナル・アイデンティティの形成

(3) 同書同頁。

(4) Israeli Jews—ナダヤの要因が主。  
Jewish Israelis—イスラエルの要因が主。

(Simon N. Herman, *Israelis and Jews, Random House, New York, 1970*)

(5) エロランにおけるユダヤ人排斥の歴史との関連において“Never Again”をイスラエル国家防衛の必要性とむすびつける意識は、このイスラエル・アイデンティティの形成から導き出されるものである。

(6) ローマ軍への最後の反抗の拠点となり、全員玉砕したマサダとイスラエルの国防意識をむすびつける。いわゆる「マサダ・コンプレックス」は、このイスラエル・アイデンティティの形成から導き出されるものである。

(7) アンシケナーシムはキリスト教徒との関係における自分たちの迫害された歴史を強調するため、イスラム圏のユダヤ人が自分たちと違つて異教徒と共存繁栄の時代をもつていたところを神話をこぼへりあつた。(Bernard Lewis, *The Pro-Islamic Jews, in Judaism, Vol. 17, No. 4, New York 1968, p. 401.*)

(8) イスラエル文部省におけるシモロモ・ハンエリヤフ教育官とのインタヴューにより次のことが明らかになつた。すなわち、今日の大きな問題の一つは、いかにセファルディムのディアスポラの歴史を学校で教えるかであり、そのための教科書作りの手始めに今まで知られていない部分の多かつた彼らの歴史を明らかにするための資料収集をプロジェクト・チームが行つている最中である。(一九七七年三月二十七日、エルサレム市コレシヤ街の文部省事務所にてインタヴュー)  
さらに学校教育において、アンシケナーシムの歴史が強調されつることを傍証する資料として教育者中に占めるマシヤ・アメリカ系出身者の数が異常に低いことがあげられる。

Continent of birth	Teacher training colleges		Post-primary schools		Intermediate schools	
	1974/75	1969/70	1974/75	1969/70	1974/75	1969/70
Israel	44.5	35.5	43.3	42.2	48.7	48.0
Asia-Africa	7.2	4.9	12.4	10.3	18.1	15.6
Europe-America	48.3	59.6	44.3	47.5	33.1	36.4

(per cent)

(9) シーモン・ロム、*種族意識の形成* 一一二頁。

(10) Robert Dahl, *Political Oppositions in Western Democracies, Yale Univ. Press, New Haven, 1966, pp.357-359.*

『種族意識の形成』を著したロムは、断つて「The Central Bureau of Statistics, Statistical Abstract of Israel, Jerusalem, Israel, 1976」を用いた。